
ダイの大冒険 ~未来の為に~

どたまかなづち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイの大冒険 ～未来の為に～

【NZコード】

N7799Z

【作者名】

どたまかなづち

【あらすじ】

いつの間にかダイの大冒険の世界に転生してしまった主人公。原作知識はあるものの、どう動こうか迷いながら未来の為に頑張るお話。

原作崩壊あるかもです。

プロローグ（前書き）

ダイの大冒険の二次小説です。
プロローグなので短めにしました。

次話からは、もう少し長めになる予定です。

原作崩壊する可能性があります。気をつけてください。
オリジナルの主人公がいる事によって、原作にあった展開などが
色々変わるかも知れません。
ヒロインは未定です。

プロローグ

俺は今、間違いなく戦場にいる。

最前線からは少し下がった位置だが、それでも血が流れ、死体が転がり、怒号が飛び交う戦場である。

何故こんな事になつていいのだろうか……と頭の片隅で考えながら、遠くに見えるモンスターに対し、魔道士の杖のアイテム効果でメラを放つ。

とりあえず、生き残る為に自分が出来る事を必死でやるしかないのだ。

あの人の方にも、俺はまだこんな所で死ぬ訳にはいかない。

「誰か、回復呪文を使える奴！　ここを治してやつてくれッ！」

その声を聞いた俺は、叫んだ男の元へ駆け足で近寄り、その男が連れてきた怪我をしている男に回復呪文であるホイミを唱える。呪文を唱えた瞬間、俺の掌から光が現れ、男の怪我を少しずつ治していく。

俺の力量レベルは低く、まだまだ未熟だ。しかしそんな俺のホイミでも、さすがに薬草よりは早く傷を治す事が出来る。

「……ふう、とりあえず肩の大きな傷は治しました。あとは教会に運び、手当等をしてあげて下さい」

「ああ、すまない。助かつた！」

「いえ。それでは俺は他の所へ行きますので」

今ここは戦場だ。申し訳ないが、魔力を節約する為に細かい傷などにまで回復呪文を使う訳にはいかないのだ。

大きな傷も早く治せる回復呪文の使い手が、戦……しかも援軍が来るまで耐える防衛戦で魔力切れをすぐ起こすなんて、論外なのである。

そう、この戦いは防衛戦だ。

明らかに兵士よりもモンスターの方が多いが、皆が必死で戦っている。

何故不利なのに部隊を撤退させないで必死で守っているのか。

それは、俺達がいる場所が村であり、民間人もいるからである。逃がそうにも、村は四方囲まれており、足が速い者を一人や二人程度ならともかく、集団や女子供を逃がすのは不可能に近い。

その民間人達だが、教会などの村の中では比較的大きな建物で、怪我人の治療や看病、食事の用意などをしてくれている。

兵士達は国の為という理由もあるが、今はそれ以上に滞在中も良くなしてくれていた村の人達の為にも、今回あまり戦闘を想定していなかつた後方部隊の者達が、誰一人逃げずにいつも以上の実力を発揮して頑張っている。

モンスターの襲撃がある前、自分からの参加を申し出たとはいえたまでも10歳という子供である俺は、本来ならば比較的安全であった後方部隊に予定通り配属された。

そして本隊から運ばれてくる怪我人相手への回復呪文や、部隊の雑用などをしていたのである。

いくつかの後方部隊の中でも安全な場所の部隊であり、戦闘がかつたとしても少数のモンスターと戦う程度という予測だつた為、参加するのを許可されたのである。

現在、我が国の本隊が、ある作戦を実行している。

俺達が今必死で守つている村は、その本隊がいる所と王国の間にある村である。

俺は配属された後方部隊で、先輩達に色々学びながら順調に仕事をこなしていた。

村の人達も俺達には積極的に協力してくれていたし、本隊からは実行している前線の作戦も順調に進んでいるという報告もあり、このまま終わるものだと思っていた。

ある晴れた日。そんな考えを嘲笑うかのように大量のモンスターの群れが、村に押し寄せてきた。

本隊がいる前線が崩れた訳ではない。何故なら、作戦を実行中の前線部隊とは違う方角から、モンスターの群れはやつて来たのである。

モンスターの群れによる襲撃があつたのが昼頃。今は、もうすぐ日が変わる時間帯だ。既に半日近く戦つており、辺りは暗闇に包まれている。

夜になつてモンスター達は本領発揮とばかりに襲撃の激しさは増し、逆に俺達人間は交代で休憩をしているものの、皆疲労は限界に近い。

援軍が来るのはおそらく明け方。つまり、少なくともあと数時間

この防衛戦は続く。

精神的にもギリギリである。

「…」

「…」

「おい、西側の守りが崩れそうだ！ 動ける奴は来てくれ！」

「もう駄目だ……。おしまいだあ……」

「誰か、倉庫から薬草と毒消し草、あと満月草を取ってきて！ そろそろ補充しないと…！」

そんな声があちらーーちらから聞こえる。

少ない人数で多数のモンスター相手に防衛しているので、どうしても怪我人が多く出る。

薬草が大量に使われているのは予想通りだが、前線では思つた以上に毒や麻痺を使うモンスターがいるらしく、毒消し草と満月草の減りも早い。

元々後方部隊なので、攻撃呪文より回復呪文を使えるの方が多いが、本来はあくまで安全な場所で仕事をする部隊だった為、呪文の使い手自体が少ない。

補給関係以外だと、最前線で回復呪文による治療を受けた者達を、後方で安静に休ませる場所というだけなので、この部隊が回復呪文を使う事はあまりないのである。

なので、我が部隊の回復呪文の使い手は、一人前とされるの者が数人いる程度だ。

あとは俺みたいな半人前や見習い、剣術を使う者の中に一応使える程度の者が少しいるくらいだろうか……。

兵士よりも、村に住んでいた僧侶のお爺さんが一番の使い手という有様である。

だからモンスターの群れによる襲撃を受けた時、隊長が皆に厳命した。

アイテムで済ませられる症状は、出来る限り後ろに下がってアイテムを使うよし」と。

補給部隊もあるので、回復アイテムは沢山あるのだ。使うであらう分は、既に援軍要請の時に伝令が知らせている予定だ。

また一人回復させ、下がらせる。襲撃があつてから、もう何人回復させただろうか。

そりそろ魔力も限界だ。もうすぐ休んでいる者と交代する時間だと思つので、それまでの辛抱

「おい、大丈夫か？ 交代の時間だ。まだ子供なのに、よく頑張つたな。あとは任せて休んでくれ」

「と、辛抱するまでも無かつたよしだ。

俺に声をかけたのは5歳上の先輩だ。

ついこの間、僧侶として一人前と認められたらしく、この防衛戦で貴重な回復要員の中でも、実力は上の方である。

この人が前線に戻ってきたならば安心である。少なくとも、俺の数倍は活躍してくれるだろう。

「あ、はい。分かりました。では、少し休ませてもらいます

「おう！ その間にパパッとモンスター共を全滅させてやる。お前にもう出番はないだろうから、ゆっくり休めよ～」

俺の返事を聞いた後、そんな事を言いながら俺の頭を軽く叩いた後、怪我人の元へと走つて行つた。

先輩もキツイだらう、年下の俺を安心させる為にあんな事を言ったのだろう。

兄がいたら、あんな感じなのだろうか……。

前世も今も兄という存在がいない為、そんな事を思いながら俺は仮眠をとる為に教会へと歩き出す。

前世。まだ誰にも話した事が無い、おそらく俺の最大の秘密。この世界に転生したと認識したのは、5歳の時。朝起きたら自然と前世を思い出していた。

多少混乱したものの、現在の5歳という身体の自分に違和感はなく、前世を思い出した後も、この世界での記憶が自分の記憶であると認識出来た。

俺の前世は科学というものが発展していた世界で、今の世界みたいな魔法は存在していなかつた。

いや、もしかしたらあったのかもしれないが、一般的には空想の產物であり、漫画やゲーム、映画などで使われていたものだ。

前世の記憶は28歳まで覚えている。

おそらくその年齢で死亡したんだと思うが、死亡直前の記憶はな

い。

ただ、この世界で生まれたので、気付かないで死んだんだろうなあ……程度に考えている。

この世界が夢、という可能性もあるが、この世界で生きていると認識をしている以上、あまり考へても意味がないと思う。

そんな答えが出ない事よりも、今生きていると認識しているこの世界と、生まれた国の事の方が問題だった。

メラ、ホイミ。この単語を聞いたら結構な人数の人達が、あるゲームを思い浮かべるだろう。

俺も前世で大好きだったゲームであり、一時期は社会現象にもなったRPG。

”ドラゴンクエスト”

通称ドラクエ。DQとも書く。メラやホイミは、このドラクエシリーズの魔法なのだ。

そんな魔法がある世界に転生したのだが、この世界での記憶を思い出すと、ドラクエシリーズのどの世界でもなかつた。

ドラクエはドラクエでも、俺が転生した世界はダイの大冒険だったのである。

俺が転生した世界である、ダイの大冒険。

主人公であるダイが、仲間達と共に魔王軍と戦い、大魔王を倒すまでの物語を描いた作品。

ドラクエの世界観でありながら、シリーズのどの作品でもない、新しい物語で作られた漫画だ。

その世界のホルキア大陸にある国。

多くの優秀な魔法使いや僧侶、賢者を輩出し、王族は偉大なる大賢者の血筋であるとされる、パプニカ王国。

原作の15年前、勇者アバンによって倒された、魔王ハドラーが拠点としていた地底魔城があるのがホルキア大陸であり、原作では不死騎団によって一度滅ぼされたのがパプニカ王国である。

原作の25年前。そんなパプニカ王国で、俺は生まれた。

プロローグ（後書き）

『メラ』

火炎系呪文。

魔法力で発生させた火球（火炎）を敵にぶつける攻撃呪文。メラは火炎系で最も初歩的な呪文である。

『魔道士の杖』

魔力を秘めた宝石が杖の先端に埋め込まれている。メラの効果を持つ道具としても使用できる。

攻撃力15だが、主人公はメラを使う為に持ち歩いているだけでなので、特に装備はしている訳ではない。

『ホイミ』

回復系呪文。

傷ついた身体を治癒し、失った体力を回復する呪文で、主に僧侶が得意としている。

基本的に相手の身体に触れなければ、呪文の効果はない。ホイミは回復系呪文で最も初歩的な呪文である。

『薬草』

傷の治療に効く草を調合した古くから伝わる薬。

『毒消し草』

解毒効果のある草。

『満月草』

月光のもつ神秘的な力で、麻痺した体を治せる植物。

ついにダイ大投稿してしまった……プロット自体は、かなり前からあつたんですけどねw

細かい肉付け作業、頑張ります。

パプニカ王国の、優秀な魔法使いや僧侶云々や偉大な大賢者の血筋などは、この作品オリジナル設定です。
あまり無理な設定ではないと思っていますが、どうなんでしょうか？

第1話 西親（前書き）

第1話投稿です。

今後、原作で多く語られていない部分などに独自設定があつたりしますが、違和感や矛盾点があつたらご指摘お願い致します。

第1話 西親

俺が生まれた国、パプニカ王国。

この世界の南東に、ホルキアという名の大陸がある。そのホルキア大陸の沿岸部に建国されているのが、パプニカ王国だ。

海と山に囲まれた街並みは世界有数の美しさを誇つており、風光明媚な港町として名高い。

国としての歴史も古く、古の時代から存在していると言われる大神殿は、一度は訪れておきたい場所であるとか。また、パプニカ王国は優秀な魔法使いや僧侶に加え、多くの賢者を抱えている事でも有名である。

特産品は布や金属。

パプニカ王国は独自の製糸、冶金技術を保有しており、パプニカの布や金属などは通常の物よりも価値が高い。

法術で編まれた服や作られた武具などは、高熱や強い衝撃にとても強く、更に法術の効果なのか、通常の物よりも軽い事が多い。

そのパプニカの布や金属は各国で高級品として扱われており、一般庶民にとつては、なかなか手が出しにくい物だつたりする。

また、芸術品として美しい物も沢山あり、服やドレスなどの「ザイン」や着心地も非常に良い為、富豪達にも人気がある。前世の高級ブランドみたいな感じだろうか。

ちなみに、パプニカの王族が神殿などで普段身につけている服な

どは、売れば安くても1万Gは軽く越えるらしい。

物によっては更に数倍の売値になる。

前世の約100円がこの世界の1Gくらいと言えば、如何に高級か分かるだろうか。

そんなパプニカ王国に生まれ、両親から『ティグリス』と名付けられた俺は、元気によくよくと育つていった。

最初は前世なんて全く思い出しておらず、普通の子供とあまり変わらなかつたハズだ。

そんな俺に変化があつたのは、5歳の誕生日の朝だ。

朝起きたら、前世の記憶をハッキリと思い出してたのだ。

忘れていたものを唐突に思い出したような感覚で、前世も今の自分も自然と受け入れられた。

しかし前世は28歳、今は5歳。この差によつて、思考は前世よりになつてしまつたのは、仕方ないと思つ。

ただ、5歳の子供が大人な言動をする訳にもいかず、多少子供っぽく過ごす事にした。

前世や未来云々なんて、言つてもまず誰も信じない。むしろ、下手すれば悪魔の子扱いされる可能性すらあると思つたからだ。

どうしても言わないといけないような、それこそ言わないと生死に関わる様な状況にならない限り、この秘密は墓まで持つていこうと思つている。

前世を思い出してから約1週間。

とりあえず思考が大人ベースになつたとはい、身体は子供だ。前世を思い出す前みたいに子供らしく行動しているつもりだ。さすがに両親からは少し変わったとは思われているかもだが、ある程度子供の範囲内で過ごせているから、問題ない……と思つ。

そして1週間経つた今日は、母さんが魔法を教えてくれる事になつていて。

前世を思い出した次の日から、母さんにホイミだけでも使いたい！と、3日かけてお願いしまくつた結果である。

何故ホイミなのか。単純に回復手段が欲しかつただけだ。覚えておいて損は無いと思うし、普段も怪我の治療や体力回復に役立ちそうな気がするから。

母さんの手が空いている時に簡単な座学、基本中の基本更に基本を丁寧に教えてもらい、今はいよいよ契約するところである。

「ええっと、ティグリスト？ お、お母さんが教えた通りにやれば大丈夫だからね！ おおお落ち着いてやるのよー？」

「うん、大丈夫。ちゃんと覚えているし、落ち着いてるよ」

どうやら俺が、契約する為の場所に到着してからずっと黙つていたので、母さんは俺が緊張していると思つたようだ。
というか、母さんの方が緊張している気がする。

信じられるか？ 母さん、これでもパパニカ三賢者の一人という、

魔法のスペシャリストなんだぜ……。

母さんが三賢者の一人だからか、我が家は裕福みたいで俺は結構大きな屋敷に住んでいたりする。

俺の母さん。名前はレティカで、年齢は23歳。

12歳という若さで賢者として認められ、15歳で三賢者入りした天才である。

極大呪文など以外は、ほぼ全て習得しているらしい。

しかし使えないのが悔しいのか、極大呪文もイオナズンを習得しようと今でも鍛練しているみたいで、この前『もう少しで使える気がするのになあ……』と、料理している時にボソッと呟いていた。

俺はそれを聞いた時、原作の過去において、魔王ハドラーの拠点が同じ大陸にあるのにパプニカが滅びなかつた理由つて、母さんが深く関係しているんじゃないかと疑つてしまつた。

まあ実際には、原作の三賢者レベルなら現在の三賢者以外にも結構いるみたいだし、国としての強さだろう。

さすがに母さんもマトリフ師匠並に強くは無いだろうから、母さんは主力の一人程度のハズだ。

でも、人間にしては十分過ぎる強さなんじゃないかな。その分、近接戦闘はかなり苦手らしいけど。

ちなみに容姿だが、目の色は赤で髪は水色。髪の長さは背中辺りまで伸ばしている。

身長は成人女性の平均程度で、体型は細身。

仕事中などの真面目な時は、キリッとした顔で自信に溢れ綺麗で格好良いと思えるのだが、家だと若干可愛い感じに変化する。

母さん曰く、プライベートで家族や親しい人といふ時、つまり今が素の状態らしい。きっと、公私をキッチリと分けているのだろう。

ぶつちやけ容姿はドラクH3の女賢者を想像すると良い。あれの数年後みたいな感じである。

うん、美人だ。父さんがちよつと羨ましこと感ひのは、マザコンになってしまふのだろうか。

ちなみに母さんが三賢者だからか、我が家はそこそこ大きなお屋敷だつたりする。

「とりあえず、母さんが落ち着いて。そんな状態で見られていたら、いつまで落ち着かないよ」

「う……はい」

そんな泣きそうな顔にならなくとも……。

仕事中の顔しか知らない母さんの部下達にこの状態を見せたら、どうなるかなあ。

一度だけ仕事中の母さんを見た事あるけど、まさに出来る女って感じだつたし。家で見た事ない顔だつたから、一瞬誰かと思つたよ。

さて、未だに緊張して渋田な母さんはスルーするとして、早速契約をしようと思ひ。おもろく契約を済ませるまでは、そのままな気がするし。

「この世界の魔法は、基本的に魔法の儀式による契約をしないと使う事は出来ない。

契約が成功すれば、力量次第でその魔法を使えるようになる可能性があり、失敗したならまず使う事は出来ないと言われている。

契約するには通常は専用の魔法陣を地面に描く必要がある。

その魔法陣の中央に立つか座った後、精神を集中しながら魔法力を高め、
を使いたい、覚えたいと念じるのが一般的だ。

他にも、神や精霊へ願つたり、複雑な詠唱や儀式をする方法もあるらしい。

今回の俺が契約するのは、回復呪文の初步であるホイミなので、比較的簡単である一般的な方法で契約する。

俺は母さんが準備した魔法陣の中央に座り、両手を合わせ意識を集中する。

そして教わった通りに徐々に魔法力を高めていき、あとはひたすらホイミを使いたい、覚えたいと念じる。

数十秒か数分か……集中していた為自分では分からないが、ある程度時間が経つた時、何となく高めていた魔法力に違和感を覚えた。なんだろうと疑問に思った次の瞬間、高めていた魔法力が光となって魔法陣から現れ、俺の身体を包んでいく。

そして数秒後、その光が俺の身体に吸収されるようにして少しづつ弱まっていく。

やがて完全に光が収まつて、そこでようやく一息つく。

「……ふう。母さん、これって契約成功？」

おそらく成功したとは思うのだが、契約自体が初めてなので、一応母さんに確認する。

「うん、完璧！ やすがお母さんの息子、やっぱり才能あるのよ！ 天才？ 天才かしら？ 将来は三賢者……いいえ、世界に名を轟かせる大賢者ね。そして可愛いお嫁さんを貰つて お嫁さん？ そんなのティグリスにはまだ早いわっ！ あ、でもそんな事に口を出したらティグリスに嫌われるかしら……うーん。そうね、どうせならお嫁さんは家庭的で優しい子が 「 緊張で涙目になつて、母さんはどこへやら、満面の笑みで契約成功を教えてくれた。そして何やらクルクル周りながら色々話しているが、気にしない。落ち着くまでスルーしておこう。

下手に近付いたり声をかけたら、そのまま巻き込まれる。

おそらく抱きしめられながら一緒にクルクル回るか、脱線した話に付き合わされる結果になる気がする。

お嫁さんについて話されても困る。俺まだ5歳だし。母さんの妄想の中では、俺は今いくつになつているのだろう……。

まあお嫁さん云々は別にして、俺は三賢者である母さんの息子だ。天才は言い過ぎだが、契約前から簡単な魔法程度なら使える才能はあるだろうと思つていた。

それに昨日、祖母や母さんの血筋的に考えてある程度の才能はあるだろうって、父さんも母さんも言つていたし、契約を成功させる自信はあつたのだ。

息子に才能はあると思つていたのに緊張で涙目だった母さんは、まあ……初めての子供の初めての契約だつたから、だと思つ。初歩の呪文の契約を成功させただけで天才とか言つているのは、その反動で変な具合で親バカが発動したのだろう。

さて、魔法を使うのには第一に血筋、第二に才能が大きく関係する。

だから、いくら努力しても絶対に魔法が使えない、という事も多いのだ。

パブニカに賢者が多いのは、才能や先人達の教え以上に、王族や重臣達の血筋が大きく関係している。

基本的に魔法の才能があればある程、剣術や格闘の才能が無い事が多く、逆に魔法の才能が無い者は、剣術や格闘による近接戦闘の才能がある事が多い。

だからこそ魔法の才能がある者は、身体を鍛えるよりも様々な知識を身につけたり、魔法力を高める事を優先する。

逆に、魔法が使えない者や不得意な者が技術を身につけたり身体を鍛えれば、魔法が得意な者が同じ内容で鍛練をするよりも、近接戦闘の面では格段に強くなれる事が多い。

しかし、もちろん例外はいるので多数の才能がある者もいる。高いレベルで剣などの近接武器と魔法を扱う事が出来る人物だ。

原作のアバン先生やノヴァなどがそうだろう。あとは拳聖ブロキーナやマアム等も、その範囲に入るだろうか。

まあ、マアムは優秀な両親の才能を、上手く引き継いだ結果でもあると思うが。

そんな事を意味もなく考えていたら、クルクル回つて妄想していた母さんが突然声を上げる。

「よーし、今夜はご馳走にしよう! テイグリスが好きな食べ物ばかりにしてあげるからね? あ、その前にレオンに自慢してこよ~とつ」

「え? あ……ちょ、まつ」

「駆走宣言をしたと思ったら、俺の返事も聞かずに何やら誰かに自慢して走つて行く母さん。

うーむ。この後、実際にホイミを使つとこりまで教えてもらひたかったんだけどなあ……。

まあ、結構集中したから思つていた以上に疲れたし、今日は契約成功とゞ駆走で満足しておこいつ。

今から好物の魚料理を食べるのが楽しみである。

ところで、レオンつてパプニカ王の名前だつたような……。

いや、まさかね。いくら母さんが三賢者とはいえ、王様を呼び捨ては無いだろ？

あ、でも今の王様はかなり若くて、去年王様になつたばかりなんだよな。

王子時代は優秀な賢者としても有名だつたみたいだし、その時に知り合つて仲良くなつた、とかかな？

うーん、分からん。いいや、そのうち判明するだろ？、家に帰つて夕飯まで部屋で休む事にしよう。

契約を成功させ、母さんの謎が増えた日から約一ヶ月。

母さんに魔法を使うコツ等を聞きながら、毎日ホイミの練習をしている。

魔法を使うのに重要なのは、集中力と魔法のイメージだ。その為、俺は午前中は基本である瞑想をしつかりとやり、午後から魔法の練習をしていた。

ホイミを使う事自体は最初の一週間で出来たのだが、本当に使えるだけという状態だつた。

紙で軽く切つてしまつた指にホイミを使つたら、何となく分かる程度の小さい傷なのに、凄く時間をかけてようやく治るといつ感じ。あまりの効果の薄さに若干涙目な俺だが、母さん曰く5歳で使えるだけでも十分らしい。

それにまだ魔法力も低いし、魔法を使う事にも慣れていない為、あまり効果が無いのは魔法を使うのが初めの者ならば、普通にある事だとか。

一ヶ月経つた今は、小さな傷程度ならば、ある程度の早さで治せるようになった。まだまだ通常のホイミの効果まで遠いけどね。

ちなみに今のところホイミが活躍したのは、同年代の子供達と遊んでいる時だつたりする。

転んで怪我をした子供にホイミを唱えて治してあげたのだ。

それ以来勇者ごっこをして遊ぶ時、俺が僧侶役ばかりになつてしまつたのは、仕方ない事なのかも知れない。

さて、そんな感じで順調にホイミが使えるようになった俺だが、今は父さんの故郷であるアルキード王国に行く為に、父さんと2人で船に乗つている最中である。

父さんの両親は既に他界しているらしいのだが、父さんの姉は結婚してそのままアルキードに住んでおり、その人の娘がもうすぐ誕

生日だとかで、そのお祝いに行く事になつたのだ。

俺が以前行つたのが1歳～2歳くらいの時らしいので、俺はほぼ初めての訪問と言つても良いだろう。さすがに1～2歳の時の記憶は無いし。

ちなみに母さんは、三賢者としての大切な仕事がある為パブニカで留守番。

ちょっと寂しそうだつたけど、約1週間程度の辛抱である。

だから三賢者を辞めてくるとか言わないでほしい。俺と父さんで説得するのに時間がかかつて大変だった。

「ティグリス。もうすぐアルキーードに着くから船を下りる準備をしておけ。忘れ物が無いようにな？」

「ん、分かった」

船での移動中とでも暇だつたので、船内で軽く瞑想しながら今までの事を考えていたら、甲板にいた父さんが船内に来てアルキーードに近付いてきた事を俺に知らせてくれた。

俺の父さん。名前はイガートで、年齢は28歳。

身長は高く、おそらく180cm台の後半くらいはあると思つ。その高い身長に加え、鋭い眼光にガツチリとした体格、筋肉質な肉体なので、正直慣れてない人からしたら、威圧感がハンパない事だろう。

田も髪も色は黒で、髪の長さは結構短く切つている。

あと、父さんは魔法は使えないが剣を扱える。本人曰く、強さは

普通の兵よりちょっと強い程度……らしい。

しかし体格や筋肉を見る限り、本當がどうか怪しい。ちょっと強い程度の身体じゃない気がする。

ちなみに俺は、今のところ母さん似の容姿なのだが、男としては父さん似の身長や体格になる事を祈りたい。

顔は、まあ母さんも真面目な顔は凜々しいから特に不満はない。似ているというだけで、女の子に見える訳じゃないし。誰がどう見ても男の子である。

さて、父さんと共に船を下りる為の準備をしているのだが、準備と言つても俺の荷物なんて少ないので、すぐに終わつた。殆ど父さんが持つていてるし。

忘れたら困るのは、母さんに貰つた魔道士の杖くらいだ。1500G程度の価値があるという、結構な値段の杖である。

ホイミを覚えた御褒美＆護身用、らしい。

出発前に渡されたので、8割以上後者が理由だと思うが、子供に持たせるには物騒で高価過ぎるとと思うし、剣を扱える父さんがいるから心配ないとと思う。

まあ、アイテムの効果で火炎呪文のメラを放つ事が出来るので、嬉々として貰つておいたが。

「父さん、準備終わつたよ」

「うむ。では甲板に行こう。もうアルキード王国に着くだろうからな。誕生日パーティーは明日だから、アルキードに着いたら今日はゆっくり休むといい」

準備を終えた俺はそれを父さんに知らせ、一人で甲板に移動する。

船での移動は慣れなかつたので、父さんの言ひ通りアルキードに着いたらゆつくり休もうと思つ。

ちなみに、本来なら既に昨日着いているハズだつたのだが、母さんが駄々をこねたので一日遅れたのだ。まあ船で間に合いそうになかつたら、母さんにルーラをせるつもりだつたけど、早めに説得出来て良かつた。

父さんの故郷、アルキード王国。

アルキードがあるのはギルドメイン大陸。

ギルドメイン大陸は世界の中心にあり、世界で最も大きい大陸だ。豊かな国も他の大陸に比べて多くある。

そのギルドメイン大陸の南端の半島にあるのが、アルキード王国である。

余談だが、ギルドメイン大陸の形状は前世の日本の本島に似ており、本島を横にしたような感じだつたりする。

アルキードは、千葉の房総半島の更に南部分に陸が続いた感じの場所、だろうか。

ちなみにパプニカ王国があるホルキア大陸は、形状が四国に似ている。

アルキードは原作の時期では半島^じと消滅していた国なのだが、この国が存在するという事は、今が原作の過去であるという事である。

まあ、その事実 자체は、前世を思い出してからすぐに判明したんだけどね……。

何故なら、パプニカとアルキードは王家同士の仲が良く、距離的にも近いから船による交易なども盛んに行っている友好国なのである。

位置的には、アルキードはパプニカの北西辺りにあるとしている。パプニカにいれば、自然と色々な人の口から何度もアルキードの名を聞く事が出来る。

そんなアルキード王国の城下街に到着したのだが、父さんは入口付近の宿屋を素通りし、更に民家が建ち並ぶ方へ続く道も素通りし、そのまま大通りをスタスター迷いなく進んでいく。

俺は父さんに手を引かれながら歩いているのだが、父さんはどこに行く気なのだろうか。

少し気になつた俺は、率直に父さんに聞いてみる。

「父さん、どこ行くの？ 宿屋も、民家が集まつている場所への道も、なんか通り過ぎちゃつたよ？」

「ん？ 何を言つて……ああ、物心がついてからのティグリスには言つた事なかつたか。俺達が向かつてるのは、あそこだ」

そう言つて父さんが、とある場所を指差す。
いや、その先にはもう城しかないよつな……。

「あの城に俺の姉上が住んでいるんだ。姉上は王妃、つまりアルキード王の奥さんなんだ」

……え？ マジで？

第1話 西親（後書き）

どうもです。第1話を読んでいただき、ありがとうございます。
本編でいくつか独自設定を盛り込みましたが、違和感とか矛盾が
無いと良いですが、大丈夫でしょうかね……。

次回はあの人気が登場です。お楽しみに！

ここから下は、登場した人物や魔法の簡単な紹介を書きます。
登場人物紹介は、今後話数が増えて来たら別途用意します。

・人物

『ティグリスト』

この作品の主人公。第1話時点で5歳の男の子。

転生者であるが、ダイ大世界に生まれてから5歳になるまで前世
を忘れていた。

『レティカ』

主人公の母親。第1話時点で23歳。

現在、三賢者の一人である。パプニカ王と親しい模様。

『イガート』

主人公の父親。第1話時点で28歳。

アルキード王妃の弟らしい。

『レオン』

パプニカ王。第1話では名前だけの登場である。
現時点では詳細不明。

・魔法

『イオナズン』

空気中の成分を魔法力で合成し、相手のいる空間に大爆発を巻き起こす呪文が、イオ系の呪文だ。

数ある攻撃呪文の中でも最大級の破壊力をもつた呪文であり、直撃を受けた場合のダメージは計り知れない。

イオナズンはイオ系で最も強力な極大呪文である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7799z/>

ダイの大冒険～未来の為に～

2011年12月28日22時47分発行